ドイツ語圏の国歌について

木 村 佐 千 子

学生に外国について紹介する際、国際競技会の放送などで耳にする機会の多い国歌というものは、国旗と並んで親しみがあり、重要な要素になりうる。しかし、本学科で対象となるドイツ語圏の国歌に関しての日本語資料は思いのほか少なく、特に原語の歌詞と対訳になっているもの、楽譜が載せられているものは探すのが非常に困難であるうえ[1)]、一般に国歌成立の経緯などは説明されていない。そこで、本稿では、授業用資料として役立てられるよう、ドイツ語圏各国の国歌に関する情報を整理し、資料として歌詞対訳と楽譜を掲載したい。なお、本稿執筆にあたっては、各国の大使館員の方々にも情報を提供していただくなど、ご協力いただいた。御礼を申し上げたい。

はじめに、ドイツ語圏という定義であるが、ドイツ語が公式な言語として話されているのは、ドイツ連邦共和国、オーストリア共和国、スイス連邦、リヒテンシュタイン公国、ルクセンブルグ大公国、ベルギー王国であり、イタリア共和国でもドイツ語の話されている地域がある。ドイツ、オーストリア、リヒテンシュタインの 3 国については国歌はドイツ語によるもののみである。スイスの国歌は、最初にドイツ語で書かれたものが他の公用語(フランス語、イタリア語、ロマンス語)とスルセルヴィシュ語にも訳され、歌われている。ルクセン

1) 167 カ国の国歌の日本語訳の歌詞だけが載せられているものに、情報センター出版局編『写真集。国歌』(情報センター出版局、2000 年)があるが、訳は原詩の意味に必ずしも忠実ではない。いとうやまね著『ワールドカップで国歌斉唱 !』(ベースボール・マガジン社、2002 年)には、ドイツ国歌の成立事情も短く解説されているが、情報に誤った点がある。大泉書店編集部編『CD付き世界の国旗国歌』(大泉書店、1998 年)は、42 カ国の国歌について、楽譜も原語で(ミスタイプは散見されるが)掲載されている点で注目されるが、現在は絶版となっている。インターネットのホームページから得ることのできる情報もあるが、当該国の政府のサイトを除き、内容を吟味して扱う必要がある。

ブルグの国歌はルクセンブルグ語で書かれている。それが 2004 年 4 月までの EU の各公用語に訳されており、ドイツ語ヴァージョンも存在するが[2)]、ドイツ語で歌われることはない[3)]。ベルギーでは、ドイツ語は公用語になってはいるが、国歌のドイツ語歌詞は存在しない[4)]。イタリアでは、ドイツ語が話されている地域があるが、国歌にドイツ語の歌詞はない[5)]。以上のような状況から、本稿では、ドイツ、オーストリア、スイス、リヒテンシュタインの国歌を主に扱い、最後に EU（欧州連合）の歌に言及したい。

＊ ＊ ＊

ドイツ国歌

現在のドイツ国歌の旋律は、1797 年に初演されたハイドン Joseph Haydn（1732–1809）作曲の《皇帝賛歌「神よ、皇帝フランツを守りたまえ Gott! erhalte Franz den Kaiser」》（Hob. XXVIa: 43）からとられている。ドイツ国歌については多数の文献が出されているが、筆者の調査した限り、ハイドンの作曲当時から今日にいたるドイツ国歌をめぐる状況について網羅的にまとめられているものは外国語の文献でも存在しないので、ここで詳しく紹介したい。

1796 年の終わり、オーストリアはナポレオン軍に脅かされるなど政治的に不安定な情況にあり、皇帝のもとでの国民の団結が強く求められていた。当時の

2） http://www.gouvernement.lu/tout–savoir/histoire–monarchie/hymne–national/index.html

3） ルクセンブルグ大使館の松野氏から筆者宛の 2004 年 9 月 13 日、9 月 15 日付の電子メールによる。ルクセンブルグの国歌はレンツ Michel Lentz（1820–1893）作詞、ジネン Jean-Antoine Zinnen 作曲の《わが祖国 Ons Heemecht》である。19 世紀前半のナショナリズム運動により、それまでドイツ語のモーゼル・フランケン方言の話し言葉だった言語がルクセンブルグ語として発展し、1847 年にはじめてのルクセンブルグ語辞書も刊行された。作詞者レンツはそれを受けてルクセンブルグ語による創作活動を行い、この国歌の歌詞を 1859 年に書いた。国歌の歌詞では、ルクセンブルグが外国の支配から自由であることを、言語的にも表現している。

4） ベルギー大使館の伊達氏から筆者宛の 2004 年 9 月 10 日付の電子メールによる。

5） イタリア大使館の多々良氏から筆者宛の 2004 年 9 月 6 日付の書状による。

皇帝フランツ 2 世[6]は、優柔不断で悲観的な性格で、それほど国民に愛されている人物ではなかったこともあり[7]、皇帝のもとでの団結を促すにあたり、その契機となるものが必要とされたようである。そこで、皇帝の信頼のあつかったニーダーエスターライヒ州政府の長官、ゾーラウ伯爵 Franz Josef Graf Saurau（1760–1832）は、詩人のハシュカ Lorenz Leopold Haschka（1749–1827）に、イギリスの国歌《神よ、王を守りたまえ God Save the King》[8]を手本として、翌年 2 月の皇帝の誕生日に演奏する歌の歌詞を書くように依頼した。ハシュカはクロプシュトック Friedrich Gottlieb Klopstock（1724–1803）を模倣する一派に属する詩人で、深い考えのもとに詩作するのではなく、日々の必要に応じて詩を書くタイプの人物だったようである[9]。ハシュカの『皇帝賛歌』自筆稿と一緒に、イギリス国歌の独訳（翻訳者不詳）が残されており、これを参考にしたことが分かる[10]。ハシュカが完成した歌詞をゾーラウ伯に送ったのが 1796 年 10 月 11 日であった[11]。

6） 神聖ローマ皇帝フランツ 2 世としての在位は 1792–1806 年、オーストリア皇帝フランツ 1 世としての在位は 1804–1835 年。

7） Brosche 1982, S. 9.

8） 現在もイギリス国歌であるこの歌は、国の元首が王か女王かによって歌詞が変わる。現在は “God Save the Queen” のかたちで歌われている。イギリス国歌は、アーン Thomas Augustine Arne（1710–1778）によって編曲され、1745 年に初演されたとされる。作曲者は不詳であるが、作曲者としてケアリー Henry Carey の名前が挙げられることもある。

9） Brosche 1982, S. 12.

10） Brosche 1982, S. 12–13. ブロッシェは、ハシュカが盲目的にイギリス国歌の歌詞に従ったと述べているが、イギリス国歌が 7 行×4 節であるのに対し、ハシュカの詩は 8 行×4 節の構造をとり、さらにイギリス国歌にはない内容（たとえば、第 1 節の「月桂樹の若枝 Lorbeer-Reiser」、第 4 節の「兄弟の絆 Bruder-Bande」）などが盛り込まれている。なお、この詩は、イギリス国歌を模倣しているために、ハシュカの他の詩とは書き方が異なるという。Vgl. Robbins Landon, p. 243. 1977. ハシュカの歌詞には、第 1 節全体で 6 つもの感嘆符を含むという特徴がある。Vgl. Motte 2002, S. 210. イギリス国歌では第 1 節の感嘆符は 2 つである。イギリス国歌の第 1 節の歌詞は、“God save the King / God save Great George our King; / Long live our noble King; / God save the King! / Send Him victorious / Happy and glorious, / Long to reign over us; / God save the King!”

11） Riethmüller 1987, S. 250.

Gott! erhalte Franz den Kaiser,	神よ、皇帝フランツを守りたまえ、[12]
Unsern guten Kaiser Franz!	すばらしきわれらが皇帝フランツを。
Lange lebe Franz der Kaiser	皇帝フランツ万歳、
In des Glückes hellstem Glanz!	幸福の明るい輝きのなかで末永い生命を。
Ihm erblühen Lorbeer-Reiser	月桂樹の若枝は皇帝のために花開き、
Wo er geht, zum Ehren-Kranz!	皇帝の行くところ、栄誉の冠となる。
Gott! erhalte Franz den Kaiser,	神よ、皇帝フランツを守りたまえ、
Unsern guten Kaiser Franz![13]	すばらしきわれらが皇帝フランツを。

作曲を依頼されたハイドンも、1791–92 年と 1794–95 年にロンドンなどに赴いたときにイギリス国歌を耳にしており、これに準じる、あるいはこれに優るものを作曲しようと考えたようだ。ゾーラウ伯が 1797 年 1 月 28 日にハイドンの浄書譜(ピアノ伴奏による楽譜)[14]に印刷許可を記しているため、作曲はそれまでには完了していたと考えられる。初版の印刷が至急行われ、1 月 30 日には印刷が完了していたようだ[15]。そして、1797 年 2 月 12 日、神聖ローマ皇帝フランツ 2 世の 29 歳の誕生日に初演されたのが、ハシュカ作詞、ハイドン作曲の《皇帝賛歌「神よ、皇帝フランツを守りたまえ」》である。これは、ヴィーンのブルク劇場で皇帝臨席のもとオーケストラ伴奏で演奏された[16]のみならず、同

12) 本稿における歌詞対訳は、旋律に合わせて日本語で歌うことは想定せず、原詩の意味をなるべく忠実に伝えるかたちとしたい。ドイツ語の詩の表記は、基本的に新正書法による。

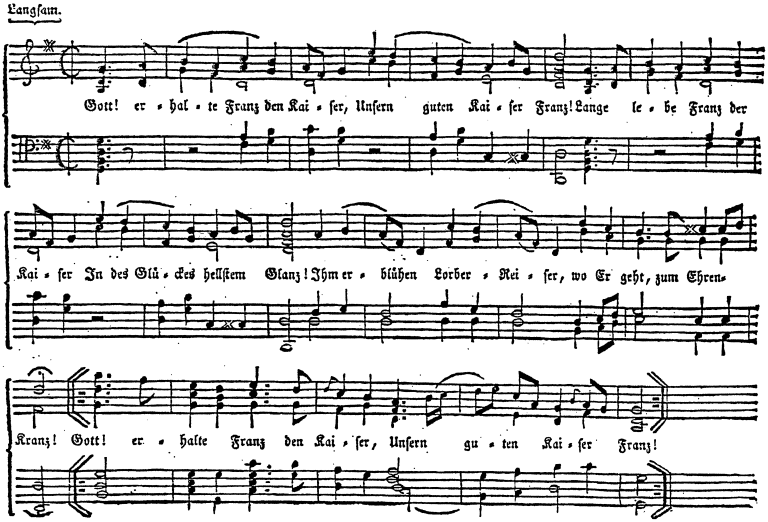
13) 全 4 節からなるが、ここでは第 1 節のみを引用する。全体の歌詞は下の譜例 1 を参照のこと。

14) オーストリア国立図書館 Österreichische Nationalbibliothek、所蔵番号: MUS. HS. 16.501, Bl. 3v. なお、ハイドンが浄書以前に記したスケッチが残っており、推敲の様子が見てとれる。Vgl. Riethmüller 1987, S. 257–259.

15) 1 月 30 日付の書状とともに、ゾーラウ伯が初版譜 1 部をプラハに送付し、プラハでの演奏を要請している。Vgl. Brosche 1982, S. 14.

16) ブルク劇場での演奏のために、ハイドンはオーケストラ伴奏の楽譜を作成した。オーストリア国立図書館、所蔵番号: MUS. HS. 16.501, Bl. 5v-6v. オーケストラの編成は、クラリーノ(C 管トランペット)2、ティンパニ、ホルン(G 管)2、オーボエ 2、フルート、ファゴット 2、ヴァイオリン 2、ヴィオラ、チェロ / コントラバスである。歌唱声部には “Canto” と表記されており、合唱 1 パート(斉唱)で歌われることが想定されていたのか独唱用として構想されたのかははっきりしない。

【譜例 1:《皇帝賛歌》初版譜[17)]】



Gott, erhalte den Kaiser!

1.

Gott! erhalte Franz den Kaiser,
Unsern guten Kaiser Franz!
Lange lebe Franz der Kaiser
In des Glückes hellstem Glanz!
Ihm erblühen Lorber-Reiser,
Wo Er geht, zum Ehren-Kranz!
Gott! erhalte Franz den Kaiser,
Unsern guten Kaiser Franz!

2.

Laß von Seiner Fahnen Spitzen
Strahlen Sieg und Furchtbarkeit!
Laß in Seinem Rathe sitzen
Weisheit, Klugheit, Redlichkeit;
Und mit Seiner Hoheit Blitzen
Schalten nur Gerechtigkeit!
Gott! erhalte Franz den Kaiser,
Unsern guten Kaiser Franz!

3.

Ströme deiner Gaben Fülle
Über Ihn, Sein Haus und Reich!
Brich der Bosheit Macht; enthülle
Jeden Schelm- und Buben-Streich!
Dein Gesetz sey stets Sein Wille;
Dieser uns Gesetzen gleich!
Gott! erhalte Franz den Kaiser,
Unsern guten Kaiser Franz!

4.

Froh erleb' Er Seiner Lande,
Seiner Völker höchsten Flor!
Seh' sie, Eins durch Bruder-Bande,
Ragen allen Andern vor;
Und vernehme noch am Rande
Später Gruft der Enkel Chor:
Gott! erhalte Franz den Kaiser,
Unsern guten Kaiser Franz!

17) オーストリア国立図書館、所蔵番号: MUS. HS. 16.501, Bl. 9/10. この初版譜には出版社名が明記されていない。オーストリア国立図書館以外でも 5 館がこの初版譜を所蔵している。

日、グラーツ、インスブルック、プラハ、レオベン、ナポレオン軍の迫るトリエステの劇場でも演奏され[18]、大成功をおさめた。

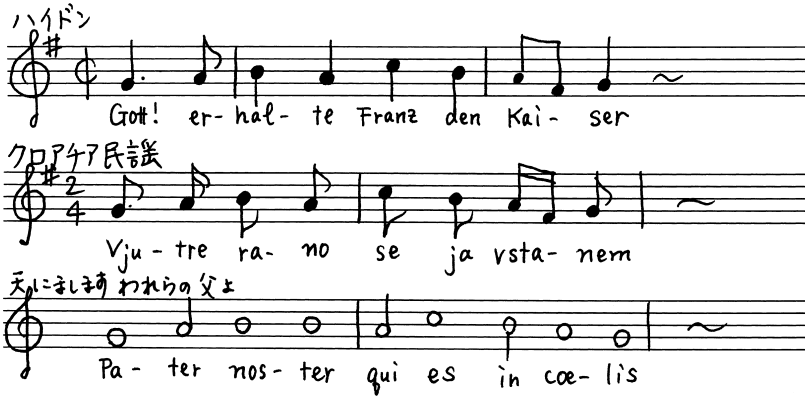
なお、この作品の成立については、異説がある。ゾーラウ伯が《皇帝賛歌》作曲全体のイニシアティヴをとったとする上記の説は、ゾーラウ伯の 1820 年 2 月 28 日付の書状の内容に基づいている[19]。それに対し、ヴィーンの宮廷図書館に勤めていたシュミット Anton Schmid という人物の著した書物（*Joseph Haydn und Niccolò Zingarelli*, 1847 年）によれば、イギリス国歌を聴いたハイドンが、ヴィーンの音楽愛好家スウィーテン男爵 Gottfried van Swieten（1733–1802）に、オーストリアにも同様の国歌があればと述べたことが発端だとされる[20]。それを受けて、スウィーテン男爵がゾーラウ伯にこれを伝え、ゾーラウ伯がハシュカに作詞を依頼したという。いずれの場合も、イギリス国歌がこの《皇帝賛歌》の成立に大きな影響を与えたことは明らかである。

このハイドン作曲の《皇帝賛歌》には、2 つの稿がある。ピアノ伴奏による独唱用の稿（初版譜の稿）と、オーケストラ伴奏による稿（ヴィーンでの初演用オーケストレーション）[21]である。ピアノ稿ではピアノの上声部と歌唱声部、オーケストラ稿では第 1 ヴァイオリンのパートと歌唱声部は、ユニゾンで同じ旋律を演奏する[22]。オーケストラ稿には、ハイドン自身の手で “Volck’s Lied” という注記がある。国民の歌という意味にも、民謡という意味にもとることができるが、これに関連し、作曲時にハイドンが参考にした可能性のある民謡がある。ハイドン自身、幼時から親しんでいたと思われるクロアチア民謡の《悲しき花嫁 Žalostna zaručnice》で、最初 1 フレーズの音符とリズムの輪郭が

18） Mader 1990, S. 1090. 初版譜がピアノ譜であったため、ヴィーン以外の都市では各都市の楽長などがオーケストラに編曲して演奏したと考えられる。Vgl. Robbins Landon 1977, pp. 246–247.
19） Brosche 1982, S. 10 および Robbins Landon 1977, pp. 241–242.
20） Brosche 1982, S. 10–12.
21） 注 16 参照。
22） これにより、歌唱声部が器楽によってしっかりと支えられる。また、歌唱声部なしで器楽のみで演奏することも可能である。

完全に一致する[23]。また、カトリックの『ローマ・ミサ典礼書　Missale Romanum』に含まれる《天にましますわれらの父よ　Pater noster》の冒頭とも、旋律に含まれる音が一致するなど、多くの旋律との類似が指摘されている[24]。

【譜例 2: ハイドンの《皇帝賛歌》の冒頭と類似した旋律】



ハイドン自身が、実際に作曲時にこれらを参考にしたかは分からないが、《皇帝賛歌》が民謡のように国民に親しまれ、かつ宗教曲のような荘厳さをあわせもつ旋律であると言うことはできよう[25]。同年、ハイドンはこの旋律を《弦楽四重奏曲「皇帝」》（作品 76–3、Hob. III: 73）（1797 年作曲、1799 年出版）の第 2 楽章の変奏主題にとりいれた。この楽章は定旋律変奏曲のかたちをとり、《皇帝賛歌》の旋律が原型通りいろいろなパートによって演奏され、他のパートがそれを彩る。《皇帝賛歌》の旋律をはっきりと聴きとることのできるようなか

23） Knispel 2002, S. 204. また、ロビンズ・ランドンは、ハイドンが 1761 年以降仕えていたエステルハージ侯爵家の居城のあったエステルハーザの近くでこの民謡が歌われていたことを指摘している。Vgl. Robbins Landon 1977, p. 273.

24） Vgl. Robbins Landon 1977, pp. 271–274.

25） 第 1 行冒頭から「神よ Gott !」と呼びかける詩であり、神に向けた祈りの性格が備わっている。なお、後年、この旋律は、イギリスやドイツでも歌詞をかえて賛美歌集にとり入れられた。

たちで、変奏曲が作曲されているのである。別のジャンルにとり入れられることにより、《皇帝賛歌》は新たな生命を得て、今日も演奏され続けている。また、イギリス国歌を参考に作られたこの《皇帝賛歌》であるが、初演後まもなく、ハイドンと交流のあった音楽史家バーニー Charles Burney（1726–1814）が《皇帝賛歌》の歌詞を英訳して[26]イギリスで紹介し、好評を博した[27]。ハイドン自身、晩年、クラヴィーア（ピアノ）でよくこの賛歌を弾いていたと伝えられ[28]、このことからも作曲者自身がこの作品を高く評価し、また愛着をもっていたことがうかがえる。この歌は、まずはオーストリアで国歌として用いられたが、1918 年、オーストリアの政治体制が変わって共和国となると、皇帝を讃えるこの歌は国歌としてふさわしくないものとされた[29]。

もとはオーストリアの皇帝のために作曲されたこの《皇帝賛歌》の旋律が、現在のドイツ国歌の旋律である。しかし、ドイツの国歌は今日に至るまでに複雑な経緯をたどっている。現行のドイツ国歌の歌詞は、ファラースレーベン Heinrich Hofmann von Fallersleben（1798–1874）がプロイセン時代の 1841 年に作詩した『ドイツ人の歌 Das Lied der Deutschen』（通称、「ドイツの歌 Deutschland-Lied」）の第 3 節である。ファラースレーベンは、童謡の作詞家として活動していた人物である。もとの詩の 3 つの節全体を挙げる。

Deutschland, Deutschland über alles,	ドイツよ、すべてにまさるドイツよ、
Über alles in der Welt,	この世のすべてにまさる国、
Wenn es stets zu Schutz und Trutze	防御のために
Brüderlich zusammen hält,	兄弟のように団結するならば、
Von der Maas bis an die Memel,	マース川からメーメル川まで、
Von der Etsch bis an den Belt	エッチュ川からベルト海峡まで
Deutschland, Deutschland über alles,	ドイツよ、すべてにまさるドイツよ、

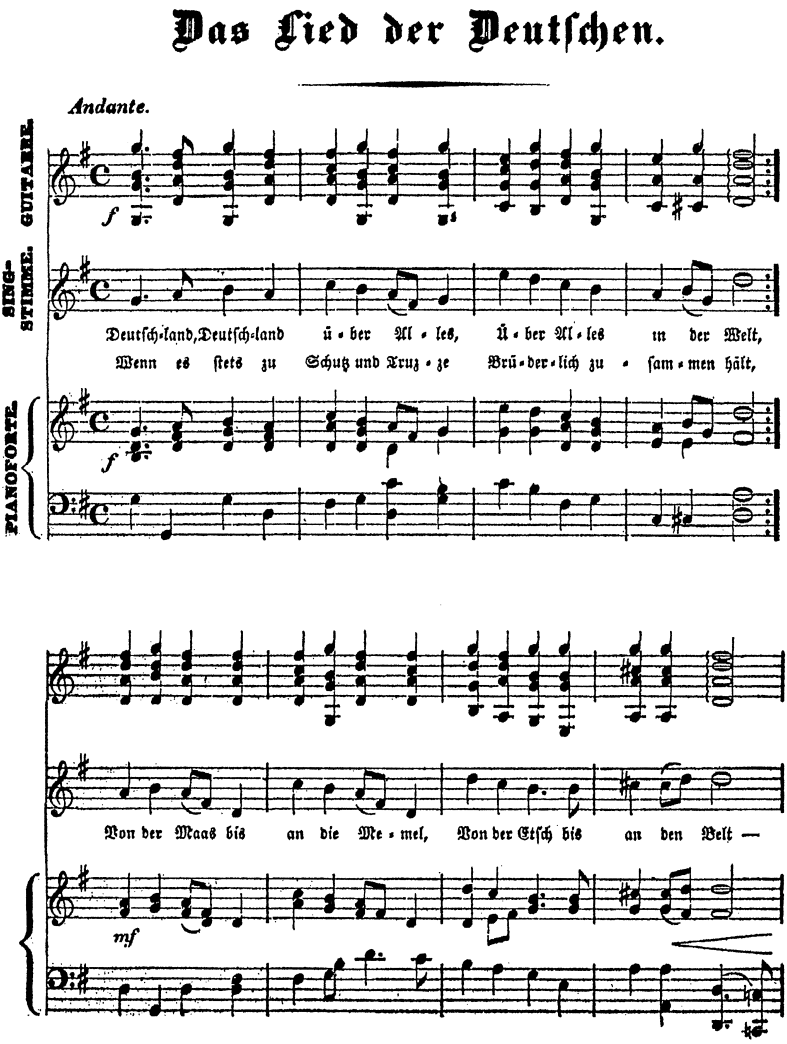
26） Robbins Landon 1977, p. 278 にバーニーの英訳（第 1 節）が掲載されている。1 節が 10 行となっているので（ハシュカの詩は 8 行）、歌う際にはハイドンの指示していない旋律の繰り返しが必要となる。
27） Otto 1997, S. 7.
28） Brosche 1982, S. 15.
29） オーストリアの国歌については後述する。

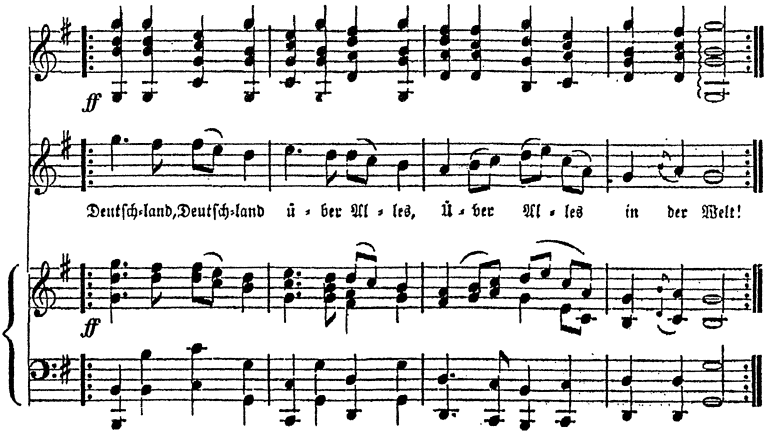
Über alles in der Welt!	この世のすべてにまさる国。
Deutsche Frauen, deutsche Treue,	ドイツの女性、ドイツの忠誠、
Deutscher Wein und deutscher Sang	ドイツのワインにドイツの歌は
Sollen in der Welt behalten	世の中に
Ihren alten schönen Klang,	古きよき評判を保ちつづけ、
Uns zu edler Tat begeistern	生涯われらを
Unser ganzes Leben lang,	崇高な行いに駆り立てる。
Deutsche Frauen, deutsche Treue	ドイツの女性、ドイツの忠誠、
Deutscher Wein und deutscher Sang.	ドイツのワインにドイツの歌は。
Einigkeit und Recht und Freiheit	団結と正義と自由を
Für das deutsche Vaterland!	祖国ドイツに捧げよう。
Danach lasst uns alle streben	そのために我らはみな
Brüderlich mit Herz und Hand!	兄弟のように手をとり心をひとつにして励もう。
Einigkeit und Recht und Freiheit	団結と正義と自由は
Sind des Glückes Unterpfand.	幸福の礎。
Blüh im Glanze dieses Glückes,	この幸福の輝きのなかで栄えよ、
Blühe, deutsches Vaterland!	栄えよ、祖国ドイツ。

この詩を理解するためには、成立当時の時代背景を知らなくてはならない。この詩が作られた 1841 年、ドイツはドイツ連邦 Deutscher Bund と呼ばれ、35 の君主国と 4 つの自由市が集まってゆるやかな全体を構成していた。各邦国は独自の歌をもっており、『ドイツ人の歌』は 39 の邦国の融合の象徴として歌われることを想定して作られた。第 1 節は他の外国を制覇しようという意味ではなく、39 の邦国がひとつに団結することを目指す内容であったと考えられる。この詩にハイドンの《皇帝賛歌》の旋律をつけ、ピアノ伴奏譜、ギター伴奏譜を加えたものが、1841 年に出版された(譜例 3)。ここで注目されるのが、ハイドンの作曲したかたちではアッラ・ブレーヴェ(2/2 拍子)のアウフタクト(弱起)で開始されていた曲が、C (4/4) 拍子に変えられ、1 拍めから始まっていることである。この拍子の変更は、通常ならばテンポダウンを伴うが、このとき速度標語が原曲の「ゆっくりと Langsam」から「歩くような速さで An-

dante」に変えられて、その傾向を和らげている(譜例 1 と譜例 3 を比較のこと)。

【譜例 3: ドイツ人の歌】





2.

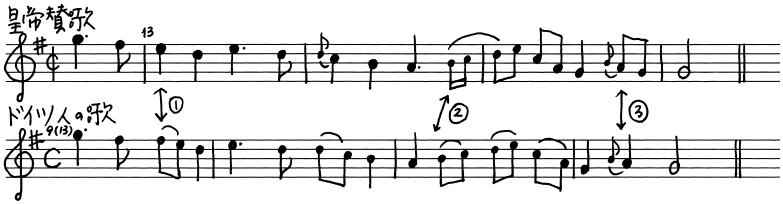
Deutsche Frauen, deutsche Treue,
Deutscher Wein und deutscher Sang
Sollen in der Welt behalten
Ihren alten schönen Klang,
Uns zu edler That begeistern
Unser ganzes Leben lang —
Deutsche Frauen, deutsche Treue,
Deutscher Wein und deutscher Sang!

3.

Einigkeit und Recht und Freiheit
Für das deutsche Vaterland!
Danach laßt uns alle streben
Brüderlich mit Herz und Hand!
Einigkeit und Recht und Freiheit
Sind des Glückes Unterpfand —
Blüh' im Glanze dieses Glückes,
Blühe deutsches Vaterland!

だが、拍子の変更に伴い拍節感が変わったこと、弱起(アウフタクト)が強起(1拍めから始まる)に変更されたことで演奏時の楽曲の表情が変わったことは明らかである。これらの変更の理由について明記している文献はないが、各節冒頭や行頭に置かれていることの多い重要な語(第1節の「ドイツ Deutschland」や第3節の「統一 Einigkeit」等)を小節の1拍めから始めることではっきりと強調し、アッラ・ブレーヴェ(2/2拍子)の流れるような印象に代えてこの曲の4分音符ひとつずつにつけられたシラブルをより大切に歌うことが目指されたのではないだろうか。そのほかに、各節最後の2行を歌うリフレイン部分で3カ所、リズムが変更されている。

【譜例 4: ハイドンの《皇帝賛歌》原曲と《ドイツ人の歌》の旋律の比較】



1点めの変更は、次の小節の旋律とリズムを統一したかたちだが[30]、それにより逆に単調さを生み出す結果ともなっている。2点めの変更は、歌いにくいと思われる16分音符2つの音型を8分音符2つとし、一般の国民に歌いやすいものとするために行われたと考えられるが、これもまた単調さの原因となりうる。3点めもやはり歌いやすさを目指しての変更だと思われるが、これもリズムの多様性を減ずる結果となっている[31]。なお、譜例3にある《ドイツ人の歌》のギター伴奏は、ハイドンの原曲にはなく、新たに加えられたものである。ま

30) 原曲の第14小節のはじめは、前打音と4分音符で記譜されているが、実質上、8分音符2つで演奏される。

31) 原曲の「前打音+8分音符2つ」は、演奏される際には実質上、「16分音符2つ+8分音符」のかたちとなる。変更後のかたちで演奏すると、8分音符2つである。1点めで16分音符を避けたのと同じ理由で、ここも変更されたのではないだろうか。

た、ピアノ伴奏パートの音符も、原曲から大幅に変更されている。すなわち、ドイツ国歌にとりいれられたのは、ハイドンの《皇帝賛歌》の全体ではなく、旋律の輪郭であったと言える。

ファラースレーベンの詩は、ハイドンの旋律で歌われたほかに 30 以上の旋律がつけられたが、すぐには広まらなかった[32)]。ハイドンの旋律を伴ってはじめて国家の公式行事で歌われたのは、1890 年 8 月 9 日、北海に浮かぶヘルゴラント島がイギリスからドイツに返還された際である。だが、その際も国歌として正式に規定されるには至らなかった。1871 年にドイツ帝国となってからも、依然として各支邦(22 の君主国と 3 つの自由市)の歌が保たれ、皇帝臨席の際には《汝の勝利の栄冠に祝福を Heil dir im Siegerkranz》(ハリス Heinrich Harries 1762–1802 作詞)がイギリス国歌と同じ旋律で歌われていた[33)]。1916 年には国歌の公募が行われ、3000 以上の応募があったという[34)]。

国歌制定への動きが進んだのは、ヴァイマル共和国時代、1920 年のことである。この年、イギリスからドイツ(ヴァイマル共和国)の現在の国歌は何かという問い合わせがあり、外務大臣のジモーネ Walter Simone は公式の国歌が存在しないことを問題視した。だが、内閣は、国歌は上からおしつけるものではなく、国民感情のなかに根づいたものでなくてはならないという理由で、ただちには国歌制定を行わない[35)]。この歌が公式にヴァイマル共和国の国歌となったのは、1922 年のことであった。1922 年 8 月 11 日の憲法記念日(ヴァイマル憲法制定 3 周年)に、エーベルト大統領 Friedrich Ebert (1871–1925) は、ファラースレーベンの詩の第 3 節を引用するかたちで、国民に対し「統一と正義と自由」を守ることの重要性を強調した。この憲法記念日の祝典のなかで、ハイドンの旋律はライトモティーフのように何度も繰り返し演奏されたという[36)]。同年 8 月 17 日、大統領は軍に対し、この《ドイツの歌 Deutschland-

32) Knispel 2002, S. 197.
33) Günther 1991, S. 4.
34) Knispel 2002, S. 197.
35) Mader 1990, S. 1092.
36) Mader 1990, S. 1093.

Lied》を国歌として演奏するよう命じた[37]。それに対し、第1節の歌詞の解釈に絡んで、第1次世界大戦終結時のヴェルサイユ条約を損なうものといった批判がフランスで出るなど、諸外国で反発が起こった。ドイツ側は、憲法記念日にエーベルト大統領が強調したのも第3節であり、第3節が国歌の核であるとする解釈を確認した[38]。

しかし、第2次世界大戦中、ナチスの政権下では、3節ある歌詞のうち、第1節のみが歌われた。第1節は、ファラースレーベンの作詩当時はドイツ連邦の39の邦国の団結を目指す内容だったが、ナチスによってドイツの領土拡大へと解釈が変えられた。たしかに、第1節の主文には動詞がなく、両方の解釈が可能ではあろう。加えて、1933年から、ナチス党の歌である《ホルスト・ヴェッセルの歌 Horst-Wessel-Lied》が国歌として歌われるようになった。作詞者のヴェッセル Horst Wessel（1907–1930）は、ナチス党員で、1930年、ベルリンで政敵により殺害された。このヴェッセルの歌が1940年に第2の国歌として正式に規定されるに至り、2つの国歌の併存する時期があった[39]。1938年にナチスがオーストリアを併合すると、これらの2曲がオーストリアでも国歌として歌われた[40]。

Horst Wessel Lied	**ホルスト・ヴェッセルの歌**
Die Fahne hoch die Reihen fest geschlossen	旗を高く揚げ、隊列をぎっしり組み、
S. A. marschiert mit ruhig festem Schritt	突撃隊は落ち着いた確固たる足取りで行進する。
Kam'raden die Rotfront und Reaktion erschossen	左翼や反動に射殺された同志は
Marschier'n im Geist in unsern Reihen mit	霊となってわれらの隊列とともに行進する。
Die Straße frei den braunen Batallionen	ナチスの褐色の大隊に道を空けよ。
Die Straße frei dem Sturmabteilungsmann	突撃隊員に道を空けよ。
Es schau'n auf's Hakenkreuz voll Hoffnung schon Millionen	幾百万の人が希望に満ちてハーケンクロイツを見上げる。

37） Mader 1990, S. 1100.
38） Mader 1990, S. 1094.
39） Riethmüller 1987, S. 245.
40） Knispel 2002, S. 199.

Der Tag für Freiheit und für Brot bricht an	自由とパンを得る日が始まる。
Zum letzten Mal wird nun Appell geblasen	ついにいまラッパが吹きならされる。
Zum Kampfe steh'n wir alle schon bereit	われらみな戦闘準備はできた。
Bald flattern Hitler-Fahnen über allen Straßen	まもなくヒトラーの旗がどの道にもひるがえる。
Die Knechtschaft dauert nur mehr kurze Zeit	圧制にあえぐのはあと少しだ。

第 2 次世界大戦後、連合国軍は、《ドイツの歌》、《ホルスト・ヴェッセルの歌》ともに歌うことを禁じた。新しい国歌についての論議は、1946 年から行われた。1949 年に、まずドイツ民主共和国（旧東ドイツ）の国歌が制定された。ベッヒャー Johannes R. Becher（1891–1958）作詞、アイスラー Hanns Eisler（1898–1962）作曲の《廃墟からよみがえり Auferstanden aus Ruinen》である。この旧東ドイツ国歌は、1972 年に歌詞が不適切[41]として歌うことが禁じられて旋律のみを演奏することとなったが、旋律は東西ドイツ統一まで用いられ続けた。

Auferstanden aus Ruinen	廃墟からよみがえり
Und der Zukunft zugewandt,	未来に向かい
Lass uns dir zum Guten dienen,	あなた[ドイツ]の幸のために仕えよう、
Deutschland, einig Vaterland.	ドイツよ、ただひとつの祖国よ。
Alte Not gilt es zu zwingen,	困難な懸案事項は一掃することが肝要。
Und wir zwingen sie vereint,	われらは一致団結してこれにあたる。
Denn es muss uns doch gelingen,	われらが目指すのは
Dass die Sonne schön wie nie	太陽がこれまでになく美しく
Über Deutschland scheint.	ドイツの上に輝くこと。
Glück und Frieden sei beschieden	幸福と平和が授かるように、
Deutschland, unserm Vaterland.	われらの祖国ドイツに。
Alle Welt sehnt sich nach Frieden,	全世界が平和を切望し、

41） 第 4 行の “Deutschland, einig Vaterland” が問題視された。Vgl. Knispel 2002, S. 200.

Reicht den Völkern eure Hand.	諸国の民にあなたがた[ドイツ人]と手をつながせる。
Wenn wir brüderlich uns einen,	われらが兄弟のようにひとつになれば、
Schlagen wird des Volkes Feind!	国民の敵は打ち負かせる。
Lasst das Licht des Friedens scheinen,	平和の光を輝かせよう、
Dass nie eine Mutter mehr	母がもう
Ihren Sohn beweint.	息子のために泣くことがないように。
Lasst uns pflügen, lasst uns bauen,	耕し、建てよう。
Lernt und schafft wie nie zuvor,	かつてないほど学び、創りだし、
Und der eignen Kraft vertrauend,	みずからの力を信じて、
Steigt ein frei Geschlecht empor.	自由な世代がたちあがる。
Deutsche Jugend, bestes Streben,	ドイツの若者、最善の努力、
Unsres Volks in dir vereint,	国民はみな君たちのうちにひとつになり、
Wirst du Deutschlands neues Leben,	君たちがドイツの新たな活力となるのだ。
Und die Sonne schön wie nie	そして、太陽はかつてないほど美しく
Über Deutschland scheint.	ドイツの上に輝く。

一方、ドイツ連邦共和国となった西ドイツでは、シラー Friedrich von Schiller（1759–1805）の『歓喜に寄す Ode an die Freude』にベートーヴェン Ludwig van Beethoven（1770–1827）の《交響曲第 9 番「合唱付き」》（作品 125、1824 年）の第 4 楽章の旋律をつけたものと、民謡《身も心も捧げ Ich hab mich ergeben mit Herz und mit Hand》が戦後、暫定的な国歌のようなかたちで用いられていた。正式な国歌の制定にあたり、当時のアデナウアー首相 Konrad Adenauer（1876–1967）は国歌の 3 番だけを残して歌うことを、当時のホイス大統領 Theodor Heuss（1884–1963）はまったく新しい国歌を作ることを望んだ。ホイスは、R. A. シュレーダー Rudolf Alexander Schröder に新しい国歌の歌詞を作ることを要請した。そして完成した『ドイツへの賛歌 Hymne an Deutschland』にロイター Hermann Reutter（1900–1985）が曲をつけたが[42)]、これは国民にあまり受け容れられなかった。1952

42） 作曲家オルフ Carl Orff（1895–1982）は国歌の作曲を依頼されたが拒否した。Vgl. Knispel 2002, S. 200.

年、アデナウアー首相とホイス大統領の間で書簡による意見交換が行われた後、『ドイツの歌』の第 3 節のみを歌うこととされた[43]。1967 年には、今日まで使われる軍楽での公式ヴァージョンがスコアとパート譜で出版された。これは、ダイゼンロート Friedrich Deisenroth（1903–）が、1926 年のハッケンベルガー O. Hackenberger の編曲を参考に仕上げたヴァージョンで、編成は管楽器と打楽器からなる（譜例は Knispel 2002, S. 201–202 を参照）。アッラ・ブレーヴェ（2/2）のアウフタクトで始まり、ハイドンのオリジナルの拍子にたちかえっており[44]、歌いにくいため 8 分音符に変更されたと思われる最終行の 16 分音符の部分も、このヴァージョンでは原曲のリズム（16 分音符）に戻されている。だが、調はもとのト長調から変ホ長調に移調されている。変ホ長調はト長調より吹奏楽の響きやすい調であり、かつ原曲の最高音が g”（2 点ト音）と高かったのを歌いやすくする意味もあって移調されたのだろう（変ホ長調での最高音は es” = 2 点変ホ音）。ただ、歌詞をつけて歌う場合は C（4/4）拍子の譜面が使われることが多い。また、ドイツ政府の出している現行の歌唱旋律のヴァージョン[45]では上述の最終行の部分は吹奏楽のヴァージョンと同じ 16 分音符となっているが、一般に流布している他の譜面では 16 分音符ではなく 8 分音符とされているものも多い。器楽伴奏付きで演奏する際に混乱が生じていないかどうかは今回調査することができなかった[46]。

もう一度、国歌をめぐって活発な議論が行われた時期がある。1990 年の東西ドイツ統一前後の時期である。東西ドイツ統一に伴い、新しいドイツ国家の誕

43） アデナウアーの 1952 年 4 月 29 日付の手紙に、「国家行事の際には第 3 節のみが歌われるべき」との記述がある。はっきり第 3 節のみを国歌とするといった法律は作られなかった。Vgl. Riethmüller, S. 245–246.

44） ただし、ハイドンの原曲の発想標語は「ゆっくりと Langsam」であったが、この編曲では「♩= 80」というメトロノーム指示にかえられている。

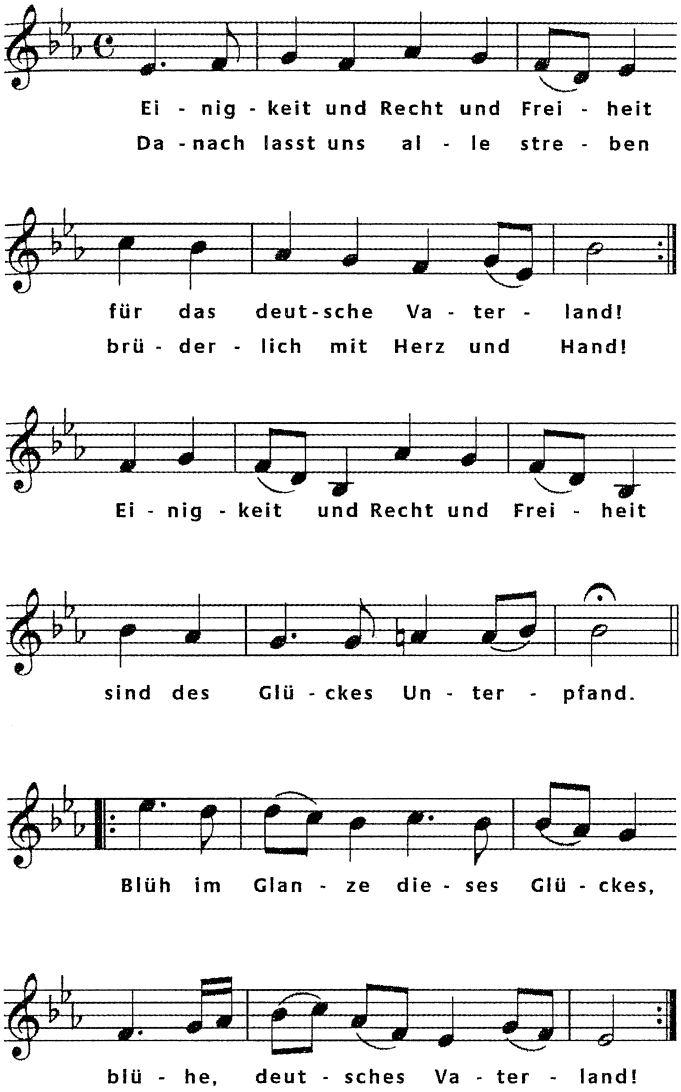
45） Auswärtiges Amt 2003, S. 107. C（4/4）拍子で 3 拍めから始まる（アウフタクト）。

46） ゲーテ・インスティトゥート Goethe Institut Inter Naiones 発行のドイツ国歌の CD（発行年表記なし）では、独唱者プライ Hermann Prey が器楽と揃えて 16 分音符でこの箇所を歌っている。独唱者 1 名ならば 16 分音符でもうまく歌うことができるが、多数の国民が斉唱する際に 16 分音符のリズムをきちんと揃えて歌うのは困難であろう。

生を象徴的にあらわす新しい国歌を求める気運が高まった。ペーターセン Peter Petersen は、旧東ドイツで用いられていたアイスラー作曲の国歌や、ナチス時代にも歌われたというよくない歴史を思い起こさせる旧西ドイツの国歌からともに離れて、歌いやすく芸術性のある別の歌を国歌とするよう求めた[47]。それは、ペーターセンにとって、ブレヒト Bertolt Brecht（1898–1956）の作詞した『子供の賛歌 Kinderhymne』にベートーヴェンの《第九》の旋律をあわせたものであった。《第九》の旋律は、1940 年のローマ・オリンピック、1964 年の東京オリンピックで、東西両ドイツの選手の健闘をたたえる際に演奏されたというような経緯もあり、《第九》の旋律をドイツ国歌にと考える人は多かったようだ[48]。しかし、1972 年来、EU の歌の旋律となっており、その点が懸案事項となった[49]。旧西ドイツの国歌を統一後のドイツでも用いる場合、国家の統一を求める第 3 節の内容は実現されたのだからもう不要であるという意見も出された[50]。旧東ドイツの国歌の歌詞の方が現状にはふさわしく、しかもハイドンの旋律にぴったり合うので、両者を結び合わせれば国歌の点でも東西ドイツ統合が行えるという意見も紹介されている[51]。しかし、結局のところ、1991 年 8 月、当時のヴァイツゼッカー大統領 Richard von Weizsäcker（1920–）とコール首相 Helmut Kohl（1930–）が書簡を交わし、近隣諸国に対し、ドイツが他国を侵略したりする意図はまったくないことを強調し、『ドイツの歌』第 3 節が国歌であることを再び明示した[52]。ハイドンの原曲の表現力が現行のドイツ国歌に至る数回の編曲を経て減じていること、歌詞も領邦国家分立の時代に書かれたものなので 21 世紀にふさわしい内容に改めるべきだと

47） Petersen 1990.
48） Günther 1991, S. 4.
49） ペーターセンは、EU の統合が進み、結束が強まるなかで、ドイツの国歌を《第九》の旋律にすれば、ヨーロッパ統合に積極的なドイツの立場をポジティヴに強調できると考えていた。Vgl. Petersen 1990, S. 4. なお、EU の歌には歌詞がない（器楽のみで演奏）。
50） Thaler 1990.
51） Günther 1991, S. 4.
52） ただし、ドイツの基本法には、国旗についての規定はあっても、国歌についての規定はない。

【譜例 5: 現行のドイツ国歌の歌唱声部[53)]】



53） Auswärtiges Amt 2003, S. 107 より転載。

いう意見も、依然として出されている[54]。だが、国歌には、ドイツ国歌に限らず、作詩当時の歴史的状況を伝えるものが多い[55]。また、戦時に愛国感情を高める意味で書かれたものも多い[56]。それらが長く歌い継がれてきているのであり、国歌の歌詞は、ある意味でその国の歴史を背負っているのだと言える。したがって、国歌の歌詞が必ずしも現在の状況に合致しているべきだとは言えないのではないか。ただ、ドイツの場合、第 2 次世界大戦後、東西ドイツ統一時と 2 回、国歌について考え直す機会があったのは確かである。そのときの対応をどう考えるかは意見の分かれるところであろう。いずれにせよ、ハイドンの旋律につけられた歌詞が 1797 年初演当時から何度も全面的に替えられた道筋をたどってくると、国歌が歌詞よりも旋律を中心としていることが窺える[57]。器楽(吹奏楽団など)のみで演奏される機会が多いのも、このことを裏づけていると言えよう。なお、現在のドイツで国歌が演奏されるのを一般の国民が聴くのは主に国際競技会の時で、国歌は国民の生活とあまり密着したものではないようだ[58]。

オーストリア国歌

最初にオーストリア国歌となったのは、すでにドイツ国歌の項で述べたハシュカ作詞、ハイドン作曲の《皇帝賛歌》(1797 年)であった。この歌は、もともと神聖ローマ皇帝フランツ 2 世をたたえる内容だったが、皇帝がフェルディナント(在位 1835–1848 年)、フランツ・ヨーゼフ 1 世(在位 1848–1916 年)と変わるたびに新しい歌詞がつけられて、ハイドンの旋律が用いられ続けた。フランツ・ヨーゼフ 1 世の時代、ザイドル Johann Gabriel Seidl (1804–75) が一般的な内容で作詞した新たな歌詞「神よ保ちたまえ、神よ守りたま

54) Knispel 2002, S. 200–207.
55) 1873 年に制定された日本の国歌《君が代》も同様である。
56) ハイドンが作曲したかたちでの《皇帝賛歌》もそうであるし、フランス国歌《ラ・マルセイエーズ》なども同様である。
57) 異なる文脈ではあるが、リートミュラーも国歌における旋律の重要性に言及している。Vgl. Riethmüller 1987, S. 249.
58) Günther 1991, S. 4.

え / われらの皇帝、われらの国を Gott erhalte, Gott beschütze, / Unsern Kaiser, unser Land」が評価され、この歌詞で 1854 年 3 月から 1918 年 11 月まで、オーストリアの国歌として歌い続けられた。1918 年、政治体制が変わり、共和国となると、帝国時代の国歌は受け継ぎにくいということで、1920 年、レンナー首相 Staatskanzler Dr. Karl Renner（1870–1950）作詞、キーンツル Wilhelm Kienzl（1857–1941）作曲の《輝かしき国、オーストリア Deutsch-Österreich, du herrliches Land》が国歌となる。しかし、この新しい国歌は国民にあまり受け容れられず、もとのハイドンの旋律を望む声が強かった。1930 年、ケルンシュトック Ottokar Kernstock（1848–1928）の新しい詩『永遠に祝福を受けよ Sei gesegnet ohne Ende』をハイドンの旋律にのせたものが国歌であるという布告が出される[59]。1938 年、オーストリアがナチス・ドイツに併合されると、ドイツの国歌 2 曲(上述の《ドイツの歌》第 1 節と《ホルスト・ヴェッセルの歌》)がオーストリアでも歌われるようになった。終戦を迎えると、ドイツもオーストリアも、連合国軍にそれまでの国歌を禁じられた。それにともない、オーストリアでは国歌の懸賞募集が行われた。その結果、国粋主義者・詩人のプレラドヴィッチ Paula von Preradović（1887–1951）の詩にモーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart（1756–1791）作として伝承されていた旋律を合わせたものが、1947 年に新しいオーストリアの国歌となった。

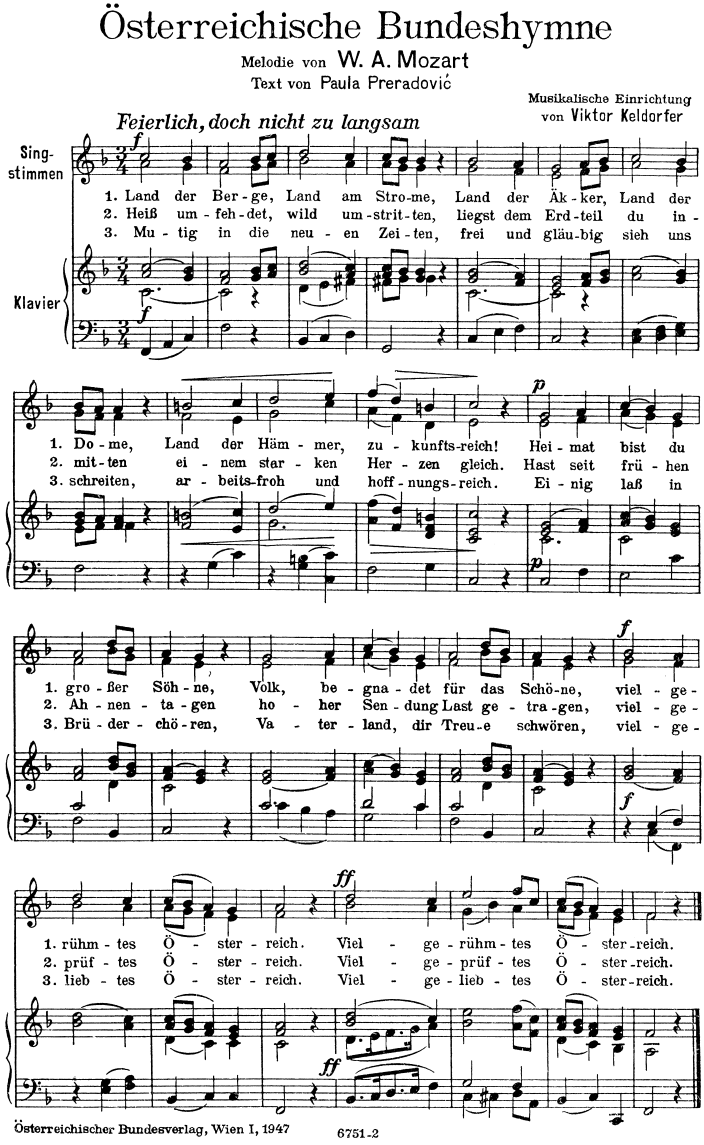
しかし、この新しい国歌には、激しい批判が寄せられた。というのも、旋律の作曲者がモーツァルトかどうかが明確ではなかったからである。オーストリアの最初の国歌がハイドンの作曲だったのだから、新しい国歌の旋律も大作曲家の作でなくてはという、音楽の国オーストリアのこだわりがあったようだ[60]。しかし、イギリス国歌も由来がはっきりせず、作曲者名がよく分からないが、「国歌のなかの国歌 Hymne der Hymnen」[61] という評判を得ている。この際

59） Grasberger 1968, S. 530.
60） Grasberger 1968, S. 530.
61） Riethmüller 1987, S. 253.

重要なのは、作曲者が誰かではなく、その旋律が国歌として歌いやすく、質の高いものであるかどうかということではないだろうか。

Land der Berge, Land am Strome,	山々のそびえる国、大河のほとりの国、
Land der Äcker, Land der Dome,	畑の国、大聖堂の国、
Land der Hämmer, zukunftsreich!	槌音の響く国、将来性のある。
Heimat bist du großer Söhne,	あなたは大いなる子らの故郷です。
Volk, begnadet für das Schöne,	民は美に恵まれて
Vielgerühmtes Österreich.	誉れ高き国、オーストリアよ。
Heiß umfehdet, wild umstritten,	激しく争い、自由に議論する国、
Liegst dem Erdteil du inmitten	あなたは大陸の真ん中に位置し、
Einem starken Herzen gleich.	強靱な心臓のよう。
Hast seit frühen Ahnentagen	先祖の昔から
Hoher Sendung Last getragen,	貴い使命という重圧に耐えてきた、
Vielgeprüftes Österreich.	試練を経た国、オーストリアよ。
Mutig in die neuen Zeiten,	新しい時代に勇敢に向かい、
Frei und gläubig sieh uns schreiten,	自由に信心深く歩む私たちをご覧ください、
Arbeitsfroh und hoffnungsreich.	喜んで働き、希望に満ちた私たちを。
Einig lass in Brüderchören,	兄弟たちの合唱に声をそろえ、
Vaterland, dir Treue schwören,	祖国よ、あなたに忠誠を誓わせてください、
Vielgeliebtes Österreich.	愛される国、オーストリアよ。

【譜例 6: オーストリア国歌[62)]】



62) 資料提供: オーストリア共和国大使館。

現行のオーストリア国歌の旋律は、モーツァルトの《フリーメーソンのためのカンタータ「高らかにわれらの喜びを告げよ Laut verkünde unsre Freude」》（KV 623）とともに印刷された歌曲《固く手を組み合わせ Lasst uns mit geschlungnen Händen》[63] である。モーツァルトのフリーメーソンのためのカンタータ（KV 623）は、モーツァルトが生前に完成した最後の作品であり（1791 年 11 月 15 日完成）、自作品目録にも最後に記入されている。モーツァルト自身も加わっていた秘密結社フリーメーソンの会堂の落成式のために作曲されたこの作品には、フラチャンスキー Joseph Hraschanzky から出された 2 種類の出版稿がある。ひとつは KV 623 のカンタータだけを含む稿、もうひとつはカンタータに加えて「□の終わりに Zum Schluß der □」という注記のある歌曲を含む稿である。フリーメーソンの支部（ロッジ）の集会は、歌で始まり、基本的に「ケッテンリート Kettenlied」と呼ばれる歌で終わる。2 つめの出版稿に含まれる歌曲は、注記などから見てこのケッテンリートと思われる[64]。つまり、第 2 の出版稿は、フリーメーソンの会堂落成式の行われた日の集会の最後に歌われた歌を含み、フリーメーソンの会員を対象として販売されたのではないかと考えられる。それに対し、この歌曲を含まない第 1 の出版譜は一般向けに販売されたのであろう。

この歌曲については、モーツァルトの自筆譜が残っておらず、自作品目録にも記入されていないため、モーツァルトの作ではないのではないかと考えられた。今日、一般にその作曲家と考えられているのは、ホルツァー Johann Holzer（1753–1818）である。ホルツァーは、1783 年からフリーメーソン支部「真なる融和 Zur wahren Eintracht」に加わり、モーツァルトが参加したことの分かっているこの支部の 8 回の集会に全て参加していた。1785 年にヨーゼフ 2 世の勅令によりフリーメーソン勢力が抑制されると、この支部は解散され、モーツァルトは支部「新授冠の希望 Zur neugekrönten Hoffnung」に加わったが、ホルツァーがこれに加わったかは分かっていない。当時のヴィー

63） モーツァルトの作品目録では、KV 623a という番号が付けられている（疑作扱い）。
64） Grasberger 1968, S. 531–533.

ンのフリーメーソンには他にも音楽家がいたが、この歌曲がホルツァー作とされるのは、ホルツァー作として出版されている歌曲と和声進行等の特徴が一致することなどからである[65)]。なお、落成式当日の記録は残っておらず、記録文書から作曲者名を明らかにすることはできない。作詞者は、フリーメーソン会員であったギーゼケ Karl Ludwig Gieseke（1761–1833）ではないかと言われている。

Lasst uns mit geschlungnen Händen,	固く手を組み合わせ、
Brüder, diese Arbeit enden	兄弟よ、この務めを終えよう、
Unter frohem Jubelschall.	歓喜の歌を歌いながら。
Es umschlinge diese Kette,	この鎖が
So wie diese heil'ge Stätte,	この聖なる場所を結び合わせたように、
Auch den ganzen Erdenball.	地球の全土を結ぶように。
Tugend und die Menschheit ehren,	徳と人間性に敬意を表し、
Sich und andern Liebe lehren,	自分にも人にも愛を教えることが、
Sei uns stets die erste Pflicht.	いつもわれらの第一の責務。
Dann strömt nicht allein in Osten,	そうすれば、光は東のみならず
Dann strömt nicht allein in Westen,	西のみならず
Auch in Süd und Norden Licht.	南にも北にも溢れるだろう。

スイスの国歌[66)]

スイスの国歌は、「スイス聖歌 Schweizer Psalm」と呼ばれている。

1841 年夏、聖職者であり作曲家であったツヴィッシヒ Alberik Zwyssig（1808–1854）のもとに、音楽出版業者、ジャーナリスト、詩人のヴィトマー

65） 通例のモーツァルトの和声進行とは決定的に異なる点がある（8〜9 小節目）。Vgl. Grasberger 1968, S. 536.

66） スイス国歌制定までの経緯については、主にスイス連邦政府の公式ホームページ上の情報に基づく。http://www.admin.ch/ch/d/schweiz/psalm/history.html、2004 年 11 月 23 日 23:30。

Leonhard Widmer（1809–1867）が愛国主義的な詩を送って曲をつけることを依頼した。ツヴィッシヒは、1835 年に作曲した宗教曲《主よ、汝を愛す Diligam te Domine》の音楽をこの詩に合わせて改作し、11 月 22 日に内輪でこの《スイス聖歌》をはじめて演奏した。1843 年にはチューリッヒの歌謡祭で演奏され、聴衆に熱狂的に受け入れられた。この歌は、スイスの他の 3 つの公用語とスルセルヴィシュ語に訳され[67]、スイス各地の男声合唱団のレパートリーとなり、愛国的な祝賀行事で歌われるようになった。

この曲を正式にスイスの国歌と宣言しようとする試みはたびたび行われたが、1894 年、スイス政府は、国歌は政府が選ぶべきではなく、それを歌う国民の民意で決めるべきだという理由で却下した。当時、《スイス聖歌》以外にスイスの公式行事でよく歌われていた歌があった。ヴィス Johann Rudolf Wyss（1782–1830）作詞の《呼ぶのは汝か、祖国よ Rufst du, mein Vaterland》（1811 年）であるが、この歌はイギリス国歌の《神よ、王(女王)を守りたまえ God save the King（Queen)》と同じ旋律で歌われ、特に器楽で演奏される場合など、混乱した状況を招いていた。このため、1961 年、スイス政府は、スイス独自のものであることが明らかな《スイス聖歌》を、3 年間の試用期間を定めて軍隊と在外公館の公式国歌とすることとした。3 年の試用期間のあと、1965 年に投票が行われた。その結果は賛成 12 州、反対 6 州で、7 州は試用期間の延長を求めた。

こういった状況下、試用期間が無期限延長されるというかたちで、《スイス聖歌》は実質上のスイス国歌とされた。他の歌を国歌としようとする提案が数々行われたが、《スイス聖歌》と同等以上の票を集めたものはなかった。1981 年 4 月 1 日、多数の国民が望んでいるという理由で、《スイス聖歌》がスイスの国歌であると正式に宣言された。

67） フランス語訳はシャテラナ Charles Chatelanat（1833–1907）、イタリア語訳はヴァルサンジャコモ Camillo Valsangiacomo（1898–1978）、ロマンス語訳はビューラー Gion Antoni Bühler（1825–1897）、スルセルヴィシュ語訳はトゥオル Alfons Tuor（1871–1904）が行った。逐語訳ではなく、国歌として歌いやすいように自由な訳とされた。

Trittst im Morgenrot daher,	暁に歩み出でたあなたを
Seh' ich dich im Strahlenmeer,	光の海のなかで私は見ます、
Dich, du Hocherhabener, Herrlicher!	崇高なる輝かしいあなたを。
Wenn der Alpenfirn sich rötet,	アルプスの雪嶺が紅に染まるとき、
Betet, freie Schweizer, betet!	祈りなさい、自由なスイス人たちよ、祈りなさい。
Eure fromme Seele ahnt,	信仰あついあなたたちの魂は感じます、
Eure fromme Seele ahnt	信仰あついあなたたちの魂は感じます、
Gott im hehren Vaterland,	貴い祖国にいます神を、
Gott den Herrn, im hehren Vaterland.	貴い祖国にいます主なる神を。

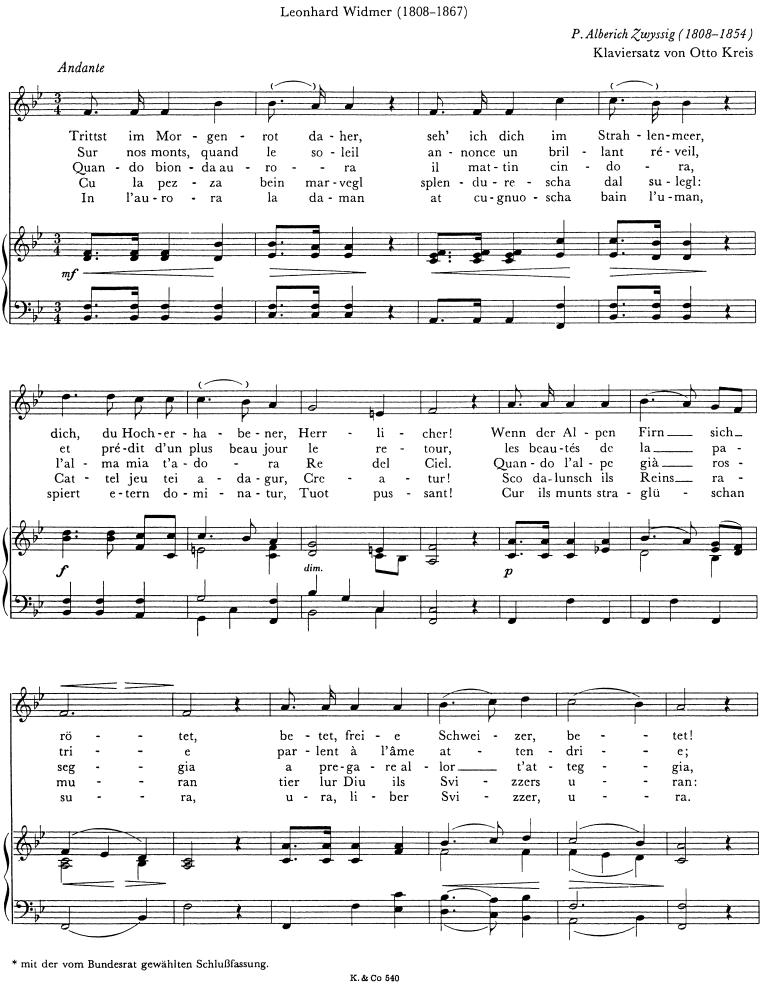
Kommst im Abendglühn daher,	夕焼けに訪れたあなたを
Find' ich dich im Sternenheer,	群れなす星々のうちに私は見出します。
Dich, du Menschenfreundlicher, Liebender!	人の友、愛するあなたを。
In des Himmels lichten Räumen	明るい天空で、
Kann ich froh und selig träumen!	私は朗らかに幸せに夢見ることができます。
Denn die fromme Seele ahnt,	なぜなら、信心深い魂が感じるからです、
Denn die fromme Seele ahnt	信心深い魂が感じるからです、
Gott im hehren Vaterland,	貴い祖国にいます神を、
Gott, den Herrn, im hehren Vaterland.	貴い祖国にいます主なる神を。

Ziehst im Nebelflor daher,	霧のヴェールに包まれて近づいてくるあなたを
Such' ich dich im Wolkenmeer,	雲の海で私は探します。
Dich, du Unergründlicher, Ewiger!	計り知れぬ深さをもつ、永遠なるあなたを。
Aus dem grauen Luftgebilde	灰色の空中楼閣から
Tritt die Sonne klar und milde,	太陽は明るくやさしく出て、
Und die fromme Seele ahnt,	信心深い魂は感じます、
Und die fromme Seele ahnt	信心深い魂は感じます、
Gott im hehren Vaterland,	貴い祖国にいます神を、
Gott, den Herrn, im hehren Vaterland.	貴い祖国にいます主なる神を。

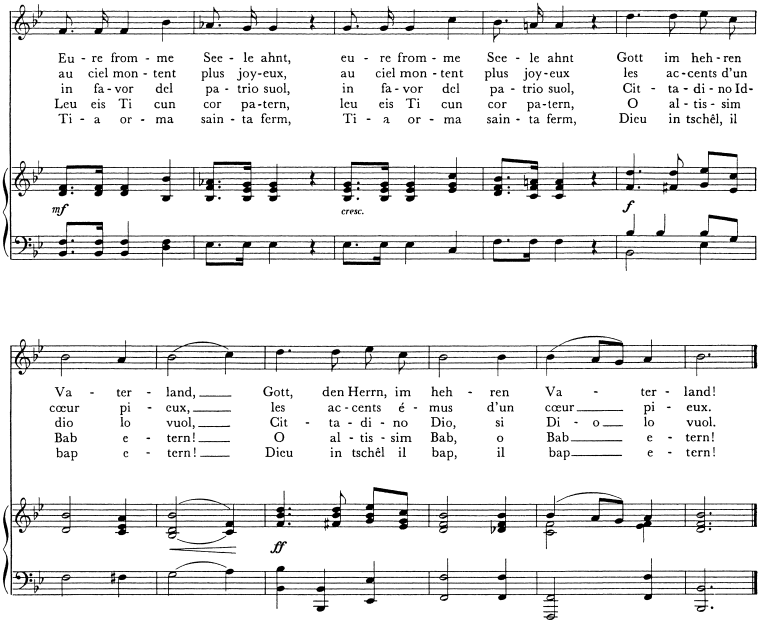
Fährst im wilden Sturm daher,	たける嵐のなかを来るあなたは、
Bist du selbst uns Hort und Wehr,	私たちの盾であり武器です、
Du, allmächtig Waltender, Rettender!	全能の統治者、救い手よ。
In Gewitternacht und Grauen	雷雨の夜と夜明けに
Lasst uns kindlich ihm vertrauen!	子供のように神に身を寄せましょう。
Ja, die fromme Seele ahnt,	そう、信心深い魂は感じます、

Ja, die fromme Seele ahnt,	信心深い魂は感じます、
Gott im hehren Vaterland,	貴い祖国にいます神を、
Gott, den Herrn, im hehren Vaterland.	貴い祖国にいます主なる神を。

【譜例 7: スイスの国歌[68)]】



68） 資料提供: 在日スイス大使館。



SCHWEIZERPSALM

Trittst im Morgenrot daher,
Seh' ich dich im Strahlenmeer,
Dich, du Hocherhabener, Herrlicher!
Wenn der Alpen Firn sich rötet,
Betet, freie Schweizer, betet.
Eure fromme Seele ahnt
Gott im hehren Vaterland!
Gott, den Herrn, im hehren Vaterland!

Kommst im Abendglühn daher,
Find' ich dich im Sternenheer,
Dich, du Menschenfreundlicher, Liebender!
In des Himmels lichten Räumen
Kann ich froh und selig träumen;
Denn die fromme Seele ahnt
Gott im hehren Vaterland!
Gott, den Herrn, im hehren Vaterland!

Ziehst im Nebelflor daher,
Such' ich dich im Wolkenmeer,
Dich, du Unergründlicher, Ewiger!
Aus dem grauen Luftgebilde
Bricht die Sonne klar und milde,
Und die fromme Seele ahnt
Gott im hehren Vaterland!
Gott, den Herrn, im hehren Vaterland!

Fährst im wilden Sturm daher,
Bist du selbst uns Hort und Wehr,
Du, allmächtig Waltender, Rettender!
In Gewitternacht und Grauen
Laßt uns kindlich ihm vertrauen!
Ja, die fromme Seele ahnt
Gott im hehren Vaterland,
Gott, den Herrn, im hehren Vaterland.

K. & Co 540

CANTIQUE SUISSE

Sur nos monts, quand le soleil
Annonce un brillant réveil,
Et prédit d'un plus beau jour le retour,
Les beautés de la patrie
Parlent à l'âme attendrie;
Au ciel montent plus joyeux
Les accents d'un cœur pieux,
Les accents émus d'un cœur pieux.

Lorsqu'un doux rayon du soir
Joue encore dans le bois noir,
Le cœur se sent plus heureux près de Dieu.
Loin des vains bruits de la plaine
L'âme en paix est plus sereine;
Au ciel montent plus joyeux
Les accents d'un cœur pieux,
Les accents émus d'un cœur pieux.

Lorsque dans la sombre nuit
La foudre éclate avec bruit,
Notre cœur pressent encore le Dieu fort;
Dans l'orage et la détresse,
Il est notre forteresse.
Offrons-lui des cœurs pieux,
Dieu nous bénira des cieux,
Dieu nous bénira du haut des cieux.

Des grands monts vient le secours,
Suisse, espère en Dieu toujours!
Garde la foi des aïeux, vis comme eux!
Sur l'autel de la patrie
Mets tes biens, ton cœur, ta vie!
C'est le trésor précieux
Que Dieu bénira des cieux,
Que Dieu bénira du haut des cieux.

SALMO SVIZZERO

Quando bionda aurora
Il mattin c'indora,
L'alma mia t'adora
Re del Ciel.
Quando l'alpe già rosseggia
A pregare allor t'atteggia,
In favor del patrio suol,
Cittadino Iddio lo vuol,
Cittadino Dio, si Dio lo vuol.

Se di nubi un velo
M'asconde il tuo cielo,
Pel tuo raggio anelo,
Dio d'amor.
Fuga o sole quei vapori
E mi rendi i tuoi favori
Di mia patria deh, pietà!
Brilla, o sol di verità,
Brilla sol, o sol di verità!

PSALM SVIZZER
(Surselvisch)

Cu la pezza bein marvegl
Splendurescha dal sulegl:
Cattel jeu tei adagur,
Creatur!
Sco dalunsch ils Reins ramuran,
Tier lur Diu ils Svizzers uran:
Leu eis Ti cun cor patern,
O Altissim! Bab etern!
O altissim Bab, o Bab etern!

Cu'l sulegl, ch'ha tut sclariu
Va la sera da rendiu:
Ves jeu tei tras la splendur
Donatur!
Contas steilas tarlischontas
Van sur mei, salid purtontas:
Leu eis Ti cun cor patern,
O Altissim! Bab etern!
O altissim Bab, o Bab etern!

Cu'l sulegl ei stgirentaus
Da snavur il cor curclaus
Sent jeu tei, Empaladur
Dil futur!
Tras las neblas penetrescha
Glisch, che mund e cor sclarescha:
Leu eis Ti cun cor patern,
O Altissim! Bab etern!
O altissim Bab, o Bab etern!

Cu la furia digl orcan
Fa tremblar il cor human:
Dattas ti a nus vigur,
O Signur!
Els orcans ils pli sgarscheivels,
Stein nus sco nos cuolms stateivels:
Leu eis Ti cun cor patern,
O Altissim! Bab etern!
O altissim Bab, o Bab etern!

PSALM SVIZZER
(Ladinisch)

In l'aurora la daman
At cugnuoscha bain l'uman,
Spiert etern dominatur,
Tuot pussant!
Cur ils munts straglüschan sura,
Ura, liber Svizzer, ura,
Tia orma sainta ferm,
Dieu in tschêl, il bap etern.
Dieu in tschêl, il bap, il bap etern.

Eir la saira in splendur
Da las stailas in l'azur
Tai chattain nus, creatur,
Tuot pussant!
Cur cha'l firmamaint sclerescha
In noss cours fidanza crescha.
Tia orma sainta ferm,
Dieu in tschêl, il bap etern!
Dieu in tschêl, il bap, il bap etern!

Tü a nus nun est zoppà
Cur il tschêl in nüvlas sta,
Tü imperscrutabel spiert,
Tuot pussant!
Tschêl e terra t'obedeschan,
Vents e nüvlas secundeschan.
Tia orma sainta ferm,
Dieu in tschêl, il bap etern!
Dieu in tschêl, il bap, il bap etern!

Eir l'orcan plü furius
Nun at muossa main a nus,
Sco il dirigent dal muond,
Tuot pussant!
Eir in temporals terribels
Sun teis uordens bain visibels.
Tia orma sainta ferm,
Dieu in tschêl, il bap etern!
Dieu in tschêl, il bap, il bap etern!

リヒテンシュタインの国歌

リヒテンシュタインの国歌の成立事情ははっきりとは分からないが、口承によれば、リヒテンシュタイン南部バルツァースに1853〜1863年頃[69]住んでいたドイツ人牧師ヤオホ Jakob Josef Jauch（1802–1859）が1850年に[70]作詞したものとされる。

旋律は、作曲者不詳のイギリス国歌《神よ、王(女王)を守りたまえ》の旋律[71]である。イギリス国歌の旋律は、19世紀、複数の国の国歌に用いられた。たとえば、スイスで19世紀から歌われていた《呼ぶのは汝か、祖国よ》もイギリス国歌の旋律を用いていた[72]。

リヒテンシュタインの国歌の歌詞はもとは5節あったが、1963年、法律によって2節に短縮され、現在はもとの歌詞の第1節と第5節が歌われている。また、同じ1963年に、第1節の歌詞の一部が変更された(「ドイツのライン川沿いに am deutschen Rhein」が「若きライン川(上流)に am jungen Rhein」に修正)[73]。

Oben am jungen Rhein	若きライン川(上流)の高みに
Lehnet sich Liechtenstein	リヒテンシュタインは位置する、
An Alpenhöh'n.	アルプスの高地に。
Dies liebe Heimatland,	この愛しい故国、

69） Press and Information Office of the Principality of Liechtenstein, 2000, p. 11. なお、リヒテンシュタイン公国のホームページ（http://www.liechtenstein.li/eliechtenstein_main_sites/portal_fuerstentum_liechtenstein/fl-lik-liechtenstein_in_kuerze/fl-lik-landeshymne.htm、2004年11月12日)では、1852〜1856年にバルツァースで働いていた聖職者とされる。

70）『ニューグローヴ世界音楽大事典』第6巻、566頁。1850年作詞とすると、バルツァースで活動していた期間とずれが生じるが、詳細を確認することはできなかった。

71） 注8を参照。

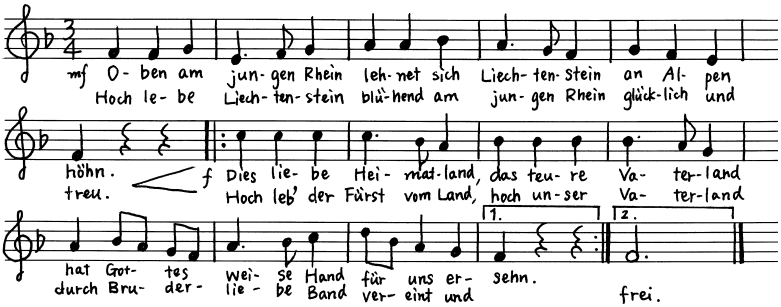
72） その他19世紀にイギリス国歌の旋律を用いていた国としては、デンマーク、スウェーデン、ロシア、アメリカ合衆国、ドイツ連邦の諸国などが挙げられる。『ニューグローヴ世界音楽大事典』第6巻、562頁。

73） Press and Information Office of the Principality of Liechtenstein 2000, p. 11 に基づく。

Das teure Vaterland,	貴い祖国は、
Hat Gottes weiser Hand	思慮深い神の御手が
Für uns erseh'n.	私たちのために選んでくださったもの。

Hoch lebe Liechtenstein,	リヒテンシュタイン万歳!
Blühend am jungen Rhein,	若いライン川(上流)で
Glücklich und treu.	幸多く、いつも変わらず永く栄えますように。
Hoch leb' der Fürst vom Land,	国の公爵万歳、
Hoch unser Vaterland,	私たちの祖国万歳、
Durch Bruderliebe-Band	兄弟愛の絆によって
Vereint und frei.	ひとつに結ばれ、自由に永らえますように。

【譜例 8: リヒテンシュタイン国歌の歌唱声部】



EU の歌

EU（欧州連合）の歌 die europäische Hymne は、1972 年、欧州会議 Europarat によって選ばれた。欧州会議は、EU の旗を創案したのと同じ機関である。1985 年 6 月にミラノで開かれた欧州理事会において、EU の歌として承認された。

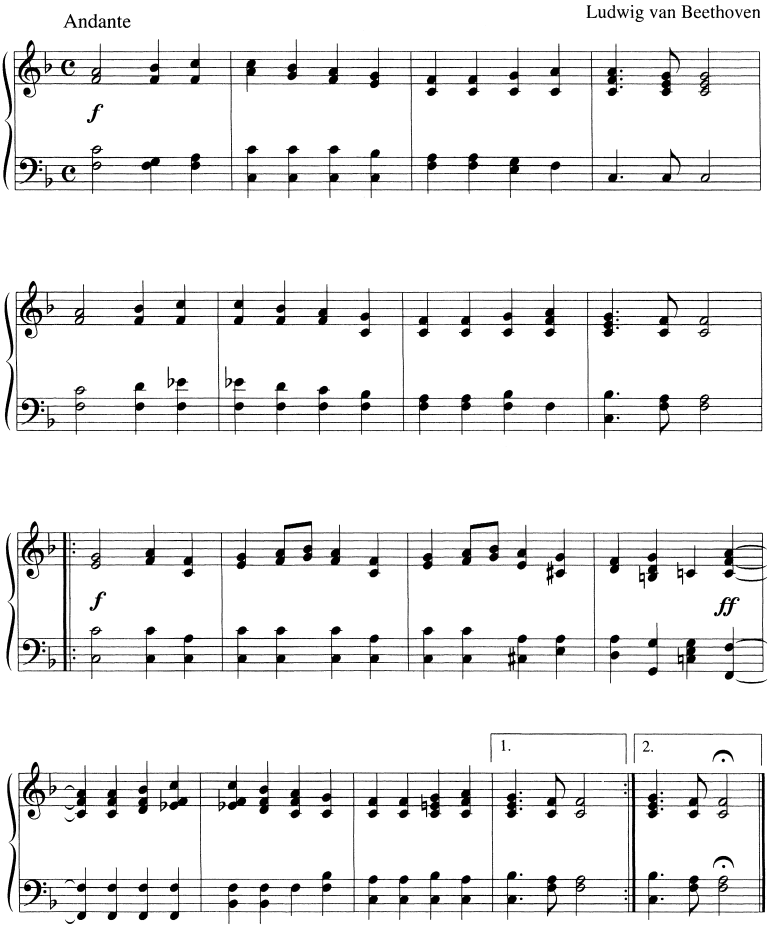
EU の歌には、歌詞がない。旋律は、ベートーヴェンの《交響曲第 9 番「合唱付き」》（作品 125、1824 年）の第 4 楽章からとられた〈歓喜の歌 Ode an die

Freude〉である。ベートーヴェンの作品にはシラーの詩(1785年)がつけられていたが、EUでは、あえて歌詞は伴わず、音楽という普遍言語で、自由、平和、団結の貴さを伝えるとしている。3つの器楽ヴァージョン(ピアノ独奏、吹奏楽団、交響楽団用)があり、いずれも指揮者カラヤン Herbert von Karajan (1908–1989) がベートーヴェンの原曲から編曲した[74]。

国歌(やそれに準ずる歌)は公式行事やスポーツ大会の際なども器楽だけで演奏される機会が多く、歌詞よりも旋律が中心的な役割を果たしていることは上で考察した。加えて、EU拡大にあわせてEU内で用いられる言語の数も増加していくことを考えれば、歌詞なしにしたという選択は有効だと考えられる。原曲となっているベートーヴェンの《第九》は多くの人に親しまれており、歌詞なしで演奏されても、原曲の精神性、原曲のもつメッセージは聴く者に強く伝わるであろう。これは、国際化の進む社会における国歌のあり方として、ひとつの究極的な姿であるとは言えないだろうか。

74) 以上、EU公式ホームページ上の情報に基づく。
http://europa.eu.int/abc/symbols/anthem.index_de.htm (2004年11月23日、23:44)

【譜例 9: EU の歌[75)]】



75） *Hymnen der Nationen — Europa*, o. J., S. 3.

参考文献[76)]

Auswärtiges Amt, Abteilung Kommunikation. *Tatsachen über Deutschland*. Berlin und Köln: Media Consulta Deutschland, 2003.

Brosche, Günther. *Joseph Haydn: Gott! erhalte Franz den Kaiser: Kommentar*. Graz: Akademische Druck- und Verlagsanstalt, 1982. (Musica manuscripta 3)

Grasberger, Franz. „Zur österreichischen Bundeshymne.“ In *Österreichische Musikzeitschrift* 1968/10: 529–538.

Günther, Urlich. „Nationalhymne: Ende oder Neuanfang.“ In *Musik & Bildung* 1991/3: 4.

Knispel, Claudia Maria. „Vom Volkslied zur Nationalhymne.“ In *Musiktheorie* 2002/3: 195–207.

Mader, Ursula. „Wie das Deutschlandlied 1922 Nationalhymne wurde.“ In *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft* 1990/12: 1088–1100.

Motte, Diether de la. „Joseph Haydns Ausruf-Lied.“ In *Musiktheorie* 2002/3: 209–223.

Otto, Hans. „Ein Lied für Franz: Vor 200 Jahren schrieb Haydn seine Hymne.” In *Concerto* 1997/1: 7–8.

Petersen, Peter. „Eine neue Hymne braucht das Land. Überlegungen zu einer gesamtdeutschen Nationalhymne.“ In *Neue Zeitschrift für Musik* 1990/9: 3–4.

Press and Information Office of the Principality of Liechtenstein. *Principality of Liechtenstein: Introduction to a small state*. Press and Information Office of the Principality of Liechtenstein, 2000.

Riethmüller, Albrecht. „Joseph Haydn und das Deutschlandlied.“ In *Archiv für Musikwissenschaft* 1987/4: 241–267.

Robbins Landon, Howard Chandler. *Haydn: Chronicles and Works 4: The Years of ‘The Creation’, 1796–1800*. Bloomington and London: Indiana University Press, 1977.

Thaler, L. „Nationalhymne auf Widerruf?“ In *Neue Zeitschrift für Musik* 1990/9: 1.

Hymnen der Nationen — Europa. Hamburg: Sikorski, o. J. (H. S. 206)

いとうやまね『ワールドカップで国歌斉唱 !』東京: ベースボール・マガジン社、2002 年。

大泉書店編集部編『CD 付き世界の国旗国歌』東京: 大泉書店、1998 年。

情報センター出版局編『写真集。国歌』東京: 情報センター出版局、2000 年。

ボイド、マルコム「国歌」谷村政次郎訳。『ニューグローヴ世界音楽大事典』第 6 巻、508 頁。

「資料。世界の国歌 IV。ヨーロッパ州」『ニューグローヴ世界音楽大事典』第 6 巻、560〜566 頁。

76） 本稿で言及したもののみを挙げる。なお、脚注では、著者姓と出版年のかたちで文献を略記している。

Nationalhymnen der deutschsprachigen Länder

Sachiko Kimura

In diesem Beitrag wird die Entstehungsgeschichte der Nationalhymnen der deutschsprachigen Länder (Deutschland, Österreich, der Schweiz und Liechtenstein) sowie der europäischen Hymne dargestellt. Texte (mit Übersetzung ins Japanische) und Noten sind beigegeben.